

武蔵野日曜聖書講筵 新年祈禱会

棄身の担い

――ルカ伝第9章51節～62節――

1976年1月11日

小池辰雄

福音は死ぬか生きるかの問題 非常識・超常識 祈り

【ルカ9】

51 イエス天に挙げらるる時満ちんとしたれば、御顔を堅くエルサレムに向けて進まんとし、⁵²己に先だちて使を遣したもう。彼ら往きてイエスの為に備をなさんとて、サマリヤ人の或村に入りしに、⁵³村人そのエルサレムに向かいて往き給うさまなるが故に、イエスを受けず、⁵⁴弟子のヤコブ、ヨハネ、これを見て言う『主よ、我らが天より火を呼び下して彼らを滅すことを欲し給うか』⁵⁵イエス顧みて彼らを戒め、⁵⁶遂に相共に他の村に往きたもう。

⁵⁷途を往くとき、或人イエスに言う『何処に往き給うとも我は従わん』⁵⁸イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥は罅あり、されど人の子は枕する所なし』⁵⁹また或人に言いたもう『我に従え』かれ言う『まず往きて我が父を葬ることを許し給え』⁶⁰イエス言いたもう『死にたる者に、その死にたる者を葬らせ、汝は往きて神の国を言い弘めよ』⁶¹また或人いう『主よ、我なんじに従わん、されど先ず家の者に別れを告ぐることを許し給え』⁶²イエス言いたもう『手を鋤につけてのち後を顧みる者は、神の国に適う者にあらず』

●福音は死ぬか生きるかの問題

ルカ伝9章51節からが、キリストがガリラヤからエルサレムへ向かう道行きの最初のことです。エルサレムに向かつてキリストが十字架の突破の道に進む。

⁵¹イエス天に挙げらるる時満ちんとしたれば、
 ということがそのことです。やがて十字架を通って、贖罪の死を遂げて、天に往かれるその時を既に予見しておられる。

御顔を堅くエルサレムに向けて進まんとし、⁵²己に先だちて使を遣したもう。

彼ら往きてイエスの為に備をなさんとて、サマリヤ人の或村に入りしに、

⁵³村人そのエルサレムに向かいて往き給うさまなるが故に、イエスを受けず、

「サマリヤ人」というのはユダヤ人と仲が悪いものだから、それでちよつと敬遠されてしま



った。

⁵⁴弟子のヤコブ、ヨハネ、これを見て言う

けしからんというわけで、

『主よ、我らが天より火を呼び下して彼らを滅すことを欲し給うか』⁵⁵イエス
顧みて彼らを戒め、⁵⁶遂に相共に他の村に往きたもう。

⁵⁷途を往くとき、或人イエスに言う『何処に往き給うとも我は従わん』

ここに甲、乙、丙と三人の人がでつくわしていますね。大いにその意気込みはいいけれども、⁵⁸イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥は罅あり、されど人の子は枕する

所なし』

「それだけの覚悟があるか」

というわけです。ところが、こう言われたので、その「従わん」と言ったのが、どうも退いたらしいね。人間的な決意ではどうにもなりません。

「人の子は枕する所なし」

と、キリストも、何と云いますかね、神の国で安らうまでは。しかし、キリストは――申し上げているとおり――至る所を枕とした。このことは『無者キリスト』の中にも書いてあります。いわゆる「枕するところのない」ような所、石枕でも草枕でも、木の根っこの枕でも枕する。

「棄身でなければダメだよ」

ということですね。

⁵⁹また或人に言いたもう『我に従え』

「ついて来なさい」と。

かれ言う『まず往きて我が父を葬ることを許し給え』

これは常識的にも「父を葬ることを許し給え」というのは、

「じゃ、いいよ。行つて葬つて来なさい」

と。まあ日曜日の集会に来る来ないということも、いろんな事情でもつてつい来ないということもあります。ある時はその事情を乗り越えるということをしなないとね、本当にキリストの弟子にはなれないです。この世的なことだね。

私はそういうことを言ってきた時に別に、

「それでも、来い」

とは言いません。言いませんけれども、それは自分で判断していく。

「自分にとっては、福音は死ぬか生きるかの問題だ」

というだけの気合があれば、そういう時にその相手の人に向かって、

「私はどうしても日曜はダメなんだ。悪いけれども」

と言って来るのが、本当の在り方です。それもできない場合もあります、現実問題は。そ



ういうことを私はいちいち言いませんけれども。

●非常識・超常識

60 イエス言いたもう『死にたる者に、その死にたる者を葬らせ、汝は往きて

神の国を言い弘めよ』

これは申し上げている通り、「死にたる者に」は誤訳で、

「死者は葬儀屋に任せよ」

ということです。アラミ語で「ミッター」「マッター」という言葉があつて、「マッター」（葬儀屋）に「ミッター」（死者）を任せよということ。

「死者は葬儀屋に任せて、弔いをする人に任せて、お前は直ちに行つて神の国を伝

えろ」

と。だから、この

「或人に言いたもう」

というのは、よほどこれは選ばれた人です。普通の人なら、キリストはこういうことは仰らない。けれども、「お前は」と思う人に向かつてはこういうことを仰る。即ち、神の国を宣べ伝えることのできるような人ですから。

61 また或人いう『主よ、我なんじに従わん、されど先ず家の者に別を告ぐる

ことを許し給え』

従つて行くけれども、「だけれども、まあちよつと今、別れを告げさせて下さい」と。これも常識的にいえば、「じゃ、別れを告げてこい」と言うところですけども、

62 イエス言いたもう『手を鋤につけてのち後を顧みる者は、神の国に適う者

にあらず』

まあキリストの言葉は烈しいです。我々の言葉なんか烈しいようにみえても、こんなものではないですから。もし私がこういうことを言ったら、

「小池先生は非常識だ」

と、こういうわけですよ。ところがキリストの言葉には非常識、超常識がいくらでもある。そこらのこの気合をつかまえないとね。「言葉」というものは、その気合を、その言葉が

「何を意味しているか」

ではなくて、

「どういうねらいを持った言葉であるか」

ということを受けとらないと、みんな言葉に躓く。そしてまた、本当の言葉の真意をつかまえることができません。

「右の頬を打たば、左の頬を向けよ」

とキリストは言われた。



「二里を強いなば、二里を行け」
と、そう言うキリストはみな、

「すべては棄身だぞ」

ということですよ。この棄身の愛、棄身の担い、もう何と云いますかね、そういう気合を受けとらなかつたら福音書にも躓くし、気合を受けとつたら却って力になるしと、そういうわけですよ。まあ、すべてに調和があるようにしていこうとしたって、これは無理なんで、この福音の世界では、

「弱き者には弱きものとなる」

とパウロが言ったが、その弱き者を躓かせることはいけませんけれども、本当にお互いに弾力性のある、

「信じぬき、耐えぬき、望みぬき」

という、そういう魂でいかないうと、人間関係というものは本当の力強いものにはならないです。そのようにして、我々は行きたいと思えます。

● 祈り

それじゃ、時間ありませんから、短く祈ります。

一切を知り給う主さま。ここに今、遣れる民――栗崎さん、荊尾君、服部さん、松井君、針谷君、林君、澤田君――今、このようにして祈禱会を持たされましたが、どうぞ、いろいろな事情で先に帰つた兄弟姉妹たちをあなたが深く顧みてくださるようにお願い奉ります。

我々はここに遺され、新年集会の最後の祈禱会を短いながら持たされたことを感謝いたします。どうぞ、この一年間、この一人びとりが本当にいよいよあなたに知られ、あなたを知り、あなたに愛され、また愛し、そして本当にその愛が、その力が、その生命が、その光がこの兄弟姉妹たちを通して、どうぞ、いよいよこの幕屋に浸透し、この幕屋自身が本当に互いに相忍び、相許し、相望み、相信じ、いよいよ進んで行くことができますように、切に願ひ奉ります。御霊におけるところの祈りは必ず聴かれ、また勝利することを信じて進んで参ります。何も憂いませぬ。あなたはこの聖霊を賜つて、そこに砕けつつ平伏しつついくところに、なんら問題もないことを信じて感謝いたします。どうぞ、いろいろな人間ですから、躓いたり転んだり、いろんなことがありますけれども、しかし、それら一切の経験を通して、

「信ずる者には善となる」

とある通り、この兄弟姉妹たちが一切を本当の主につける、あなたにつけるプラスにして進んで行くことができますように、魂をいよいよ鍛え、また祝福し給わんことを切に願ひ奉ります。今、兄弟姉妹たちのそれと共に御名により捧げ奉る。アーメン。

